

## 観光によるまちおこしと内発的発展

— 有松・鳴海絞と町並み保存の事例に関する観光人類学的考察 —

竹内 恵都子

### はじめに

近年、地方分権の議論とともに地方での「まちおこし」が話題になる機会が多い。地域の文化的な資源を活用した観光化も、行政の施策の一環といえる。名古屋市南東部に位置する緑区の有松では、こうした動きの以前から「町並み保存」の運動が始まり、現在は「まちおこし」「まちづくり」というより広い視野をもって活動が続けられている。有松には伝統産業の有松・鳴海絞や、旧東海道沿いに歴史的な町並みがある。筆者は、名古屋という都市部にある一地域の「内発的発展」として有松に着目する。「内発的発展」とは、押しつけられた開発によってではなく、人間的な生活を営める環境を維持しつつ自らの行動によって地域を発展させることを指す。従来「内発的発展」というと、中山間地域と都市の交流による発展の事例が取り上げられることは多くあった。筆者は、都市部の一地域では複数の主体の競争や連携が、発展につながっていることを指摘する。

また観光人類学の視点から、主にホストの見出す「有松らしさ」という「真正性」について考察する。観光化を目指す「まちおこし」の過程で、有松の人々が地域の歴史をふまえて文化を「客体化」してゆく様子をとらえた。複数の活動主体ごとに見出した多様な「真正性」が有松の「伝統の創造」に結びついていることを述べたい。

調査方法は2005年6月から12月まで主に有松、鳴海、大高にて行った住民や行政、企業への聞き取り、会合への参加、見学による。筆者は主に、有松の神社天満社の氏子の人々や、有松の町並み保存指定地区内に住む人々、また

は店舗や工場を持つ人々から聞き取りを行った。ここに有松の「まちおこし」活動の起点があるととらえるからである。

## 第1章 観光における内発的発展と政策

### 1-1 内発的発展の理論

「内発的発展 (endogenous development)」という言葉は1975年の第7回国連経済特別総会において、スウェーデンのダグ・ハマーショルド財団が提出した報告書『もう一つの発展』で使われたのが最初といわれる。日本ではこれとは別に、鶴見和子が1976年にアメリカ社会学における近代化論を批判する論文の中で「内発的発展」の言葉を使ったのが最初とされる<sup>1</sup>。その後「内発的発展」という概念は、鶴見和子、宮本憲一を中心に提唱されてきた。日本は高度経済成長を経るなかで、宮本憲一が「外来型開発 (exogenous development)<sup>2</sup>」と呼ぶ開発が各地で行われ、公害や過疎・過密という社会の歪みが生じ、1970年代には「外来型開発」による限界が認識されるようになった。社会が過度な開発への疑問を持つようになったことを背景に、西欧をモデルとする近代化論に沿った「外来型」の開発のみを志向しない、オルタナティブとしての「内発的発展」が唱えられるようになった。鶴見和子を中心とした「内発的発展」論は運動論の性格をもち、宮本憲一を中心としたグループによる「内発的発展」論は政策論の性格をもつ。また日本で「内発的発展」が提唱される以前に清成忠男と玉野井芳郎は「地域主義」を唱えている。

鶴見の提唱した「内発的発展」の理論は、政策の主体とそれに対する地域の住民の運動という二極の構造を前提に展開される。鶴見は「近代化モデルと内発的発展モデルとの関係は、少なくとも二つの型に分けることができる<sup>3</sup>」と述べる。二つの型とは「社会運動としての内発的発展」と「政策の一環として

---

1 (保母 1996 : 122)

2 宮本憲一は、「それぞれの国の土着の文化に根ざす技術や産業構造などの経済構造を無視して、先進工業国の最新の技術を導入し、その経済構造に追いつき追いこそうとする」、「外来の資本 (国の補助金をふくむ)、技術や理論に依存して開発する方法」を「外来型開発」と呼ぶ。(宮本 1989 : 285)

3 (鶴見 1989 : 54,55)

の内発的発展」とされる<sup>4</sup>。

## 1-2 観光と政策

### (1) 観光の開発

近年、日本の政府や省庁は「観光立国」をめざし様々な施策を行っている。1997年から開始した「訪日観光交流倍増計画」(Welcome Plan 21)では、訪日外国人数が2005年に700万人に達することを目指した。国際観光振興機構の調べによると2005年の訪日外国人数は620万人であった。2003年7月には観光立国関係閣僚会議で「観光立国行動計画」を取り決め、「住んでよし、訪れてよしの国づくり 戦略行動計画」に沿って、国土交通省を中心に各省庁を横断する観光政策が実施されている<sup>5</sup>。その一つとして「外国人旅行者訪日促進戦略」である「ビジット ジャパン キャンペーン」が開始された。これは訪日外国人旅行者を2010年までに1000万人とすることを目標にしている。

現在、観光は国や地域の経済政策に入れられるほど国際的に重要なテーマとなっている。観光開発は、工業の発展による開発が困難な地域や発展途上国の人々に、よりよい所得や雇用をもたらすよう期待されている<sup>6</sup>。観光分野の世界最大の国際機関として、「世界観光機関」(World Tourism Organization: 通称WTO)があり146カ国が加盟する<sup>7</sup>。

日本においても近代化を経る過程で、政府が海外からの観光客の誘致をすすめてきた。明治時代には、日本の要請により欧米を中心とした先進国から技術

4 二つの型のうち「第1は社会運動としての内発的発展である。政府または地方自治体が、近代化政策を推進する場合に、特定の地域の住民が異議申立ての運動としておこす場合である。」「第2は、政策の一環としての内発的発展である。特定地域の住民が、その地域の自然生態系と文化伝統に基づいて創り出す地域発展の仕法を、政府または地方自治体が、その政策の中に取り入れる場合である。日本の高度経済成長期に、過疎化した農村を活性化するために、地域の住民が、自発的に工夫したムラおこし運動を、県の政策として取り入れた場合がある。大分県の一村一品運動は、その顕著な事例である。」(鶴見1989:55)

5 (観光立国関係閣僚会議2003)

6 (山下1996:4)

7 2003年12月には国際連合の専門機関となった。本部をスペインのマドリッドに置く。他の国際機関としては、「OECD観光委員会」(Tourist Committee of the OECD)や、「ESCAP」(United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific: 国連アジア太平洋経済社会委員会)などがある。(長谷川1999:231,232)

者やその関係者が多数来日した。これらの外国人を業務としてもてなす機関が必要となり、1893（明治26）年に「喜賓会」（ウェルカム・ソサエティー）が設立された。外国人を接遇する宿泊施設としては、1867年に洋式館の第1号として東京・築地ホテルが建設されている。そののち、1930年には鉄道省に「(財)国際観光局」が誕生した。外国人の誘致による外貨獲得の拡大を目的とした最初の政府機関であった。戦後、日本国内の開発が進み経済的に豊かになると、1970年代後半には旧国鉄が「日本らしさ」を売りにした「エキゾチック・ジャパン」キャンペーンを展開し、国内旅行の活性化を図った。1987（昭和62）年には運輸省により「海外旅行倍増計画」（Ten Million Program）が提唱されている。

## (2) 地方分権と観光によるまちおこし

日本は経済成長とともに、「全国総合開発計画（全総）」により国土の大規模な開発を進めてきた。観光開発は全総に伴い1970年代に加速し、80年代後半から、特に1987年の「総合保養地域整備法」通称「リゾート法」の成立により拍車がかかった。しかしながら、バブルの崩壊とともに大型娯楽施設の閉鎖が相次ぐ結果となった。第4次全総までは国主導による開発計画であったが、1998年3月に閣議決定された第5次全総「21世紀の国土とランドデザイン<sup>8</sup>」では国の役割は側面的支援にあるとされている。

現在では行政のスリム化、広域化が求められ、公共事業の見直しや民間への委託が増えている。1999年7月には国会で地方分権一括法<sup>9</sup>が成立した。国や自治体は各地域にある既存の資源を活用した経済活性化策を模索している。観光の推進は、地域の特色を生かした「まちおこし」の一つになっている。国の厳しい財政状況と並行した地方分権は、地方に「内発的発展」を強いているとも言える。宮本憲一はこうした状況下の自治を「競争的地方自治<sup>10</sup>」だと述べる。地方ごとにいかに行政を効率化し、採算のとれる事業を行っていくかが

8 (国土庁1998)

9 地方分権推進計画に基づき、関連改正法律数475本からなる地方分権一括法は、中央省庁改革関連法とともに成立した。中央から地方へ財源や裁量の移譲が実現するのかが、道州制の議論とともに問われている。

10 (宮本2000:114)

課題となり、地方間で競争が生まれることを指摘している。

### (3) 観光の人類学

世界各地で観光の開発が行われる現在、観光によって生み出された文化も人類学の研究対象になっている。1974年に開かれたアメリカ人類学会の成果が、ヴァーレン・スミスにより『ホストとゲスト-観光の人類学』にまとめられた。これは観光現象をホスト（観光客を受け入れる社会）とゲスト（観光客）とのかわりにおいてとらえようとした観光人類学の最初の論集である<sup>11</sup>。

人類学によると観光は以下のようにとらえることができる。「観光(tourism)」という旅行の形態は近代におこった現象の一つである。旅(travel)は、語源的には苦痛を伴う、骨折り、労働の意味も持つものであり、こういった旅の形態は古くから存在する。ネルソン・グレーバーンは観光旅行の原型を神の恩寵、宗教的真理という精神の啓発を追及する巡礼に求めている<sup>12</sup>。宗教的な巡礼は、近代ヨーロッパで起こったルネサンスを経て、地理的・歴史的・科学的真理を発見するための「巡礼」、そして、その証拠を見るための「巡礼」である「文化観光」へと変質したという。グレーバーンは、文化的価値を追い求める「文化観光」の典型は、歴史遺跡や博物館を訪れる「歴史観光」だと述べる。

産業革命を経ると、自然や田園を賛美する思想を核にロマン主義が生まれた。「自然観光」が、従来貴族たちの教養として支配力をもっていた「文化観光」に取ってかわった。「自然観光」とは避寒地へレクリエーションや健康上の理由で出かける「レクリエーション観光」、狩猟や鷹狩りを通して自然に近づく「採集狩猟観光」を言う。しかしこれらの「自然観光」が自然そのものを傷つけ持続が困難であるため、「自然観光」は必然的に「生態観光」へと移った。自然への影響を最小限に抑えた、観察や記録を中心とする観光である。グレーバーンによる観光旅行の類型化は、西洋の近代化の歴史と不可分である<sup>13</sup>。

グレーバーンの分類に基づいた葛野浩昭による観光の分類では次のものが示されている。「遺跡ツーリズム」とは教会や寺院、博物館や美術館を訪れる

---

11 (スミス 1992)

12 (葛野 1996: 124)

13 (前掲書: 123-124)

といった「歴史観光」をさす。「民俗ツーリズム」とは全国的に有名な祭など民俗学的要素を楽しむ観光である。「エスニック・ツーリズム」とは、グレーバーンのいう「自然人」を鑑賞する「民族観光 (ethnic tourism)」を指したが、「異文化」「異民族」の多様性を味わう観光を指すようになってきた。「エコ・ツーリズム」とはガイドとともに自然の観察や研究に参加する観光を指し、「持続可能な開発」という思想と緊密な関係にある。<sup>14</sup>

観光を生み出すしかけについて、イギリスの社会学者ジョン・アーリは、ミッシェル・フーコーの「まなざし」という概念を観光に適用して述べている。「この（観光という）体験の一部は、日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけること<sup>15</sup>」である。またヴァーレン・スミスは、観光客とは変化を経験するために、家から離れた場所を、自発的に訪れる、一時的に余暇の状態にある人ととらえた<sup>16</sup>。ここでは労働の時間に身をゆだねる者が、リフレッシュし、再び労働の時間に戻っていくという時間構造がある。さらに、ネルソン・グレーバーンは観光を現代における儀礼の位置を占めるものととらえた。日常の世俗的な時間に対し、観光は聖なる時間であり、儀礼の構造<sup>17</sup>ときわめて類似しており、「聖なる旅」としての観光を論じた<sup>18</sup>。

また観光がつくりだす文化に関して、エリック・ボブスボームは「伝統の再創造」として論じている。「伝統」は多くの場合近代の「発明」である、と

14 (葛野 1996 : 125-129)

15 (アーリ 1995 : 5)

16 (山下 1996 : 4)

17 ファン・ヘネップは 1909 年の著書の中で、年齢、身分、状態、場所などの変化や移行を画する諸民族の宗教儀礼を通過儀礼として体系づけた。これにならうと、巡礼は各人が住み慣れた自宅の日常から聖地の非日常へと向かって旅する「分離期」、聖地で体験する境界的な状態を指す「過渡期」、巡礼を終えて新たなアイデンティティとともに社会に戻る「再統合期」の 3 段階に分けられる (ファン・ヘネップ 1995)。また、ヴィクター・ターナーは、アフリカの伝統的儀礼に見られる異様に高揚した集団意識を、「コムニタス」と名づけて分析した。通過儀礼の中間に位置する過渡期の「境界性」(liminality)において、人々は序列や身分といった世俗的な意識を超えて、平等な仲間意識を経験したり、ときには身分の一時逆転といった現象にも遭遇したりする (ターナー 1976)。

18 (山下 1996 : 8)

いう視点をもつ。観光の民族誌は、世界資本主義というマクロなシステムと、観光が展開されるホストのミクロな社会との「コンタクト・ゾーン」の研究として捉えている<sup>19</sup>。ジェームズ・クリフォードは、文化が境界を越えて享受され、古い伝統が新しい時代に適応し、そこに新しい文化が生成してくると論じた<sup>20</sup>。1990年代になると、トーマスやジョリー、リネキンといったポストモダンの人類学者たちは、ホブズボウムやキージングらの「伝統の発明」という見方が本質主義をひきずっているとし、そこにみられる伝統と近代の区別、発明された伝統とローカルな社会の本物の伝統との区別を批判し、「伝統の発明」という用語に代わって「文化の客体化 (objectification)」あるいは「文化の構築 (construction)」という用語を使いはじめた<sup>21</sup>。日本の研究者では太田好信が、文化の客体化とは「文化を操作できる対象として新たに作り上げること」であり、「文化や伝統はある価値体系によって解釈された結果、はじめて『真正さ』を獲得する」と述べている<sup>22</sup>。観光にたずさわる誰にとっての「真正性 (authenticity)」かが問われる。

## 第2章 有松の絞り業と地域社会の歴史

### 2-1 有松の歴史

#### (1) 有松開村と尾張藩の奨励・保護 - 江戸時代

有松の歴史をみると、1608（慶長13）年に尾張藩が治安の必要から集落をつくろうと知多郡に触れを出し、移住を奨励したことにはじまる。近隣の鳴海は、江戸時代に徳川家康が東海道を整備するときに宿駅の1つとして指定された。絞りは、1610年から1614年にわたる名古屋城の築城の折、名古屋に来た豊後の人々によって伝えられたという。竹田庄九郎が、括り染めの衣服を着る豊後の人々を見て有松絞りを考案したとされる<sup>23</sup>。また、豊後の三浦某により豊後絞りの技法が鳴海の人々に伝えられたという伝承も存在する。絞りは、

19 (山下 1996 : 10)

20 (太田 1993)

21 (永淵 1996 : 42)

22 (太田 1993 : 391)

23 (有松しほり編集委員会 1979 : 29)

二代目竹田庄九郎直治が衣料にほどこし発達した。三河や知多では白木綿が大規模に生産され、有松への綿布の供給地となっていた<sup>24</sup>。

1772(安永1)年には尾張藩は有松以外での絞りの生産を禁止し、有松に「絞改会所」を設置した。有松は1784(天明4)年の大火により甚大な被害を負ったが、尾張藩の支援もあり町は比較的早く復興した。大火の後には「紺鹿の子絞り」「養老絞り」「筋絞り」など新しい絞りが考案され、「鹿の子絞り」も始まった。1830年代には、絞り業はさらに統制され、「絞会所」が設置され、株仲間が組織された。株を所有する21軒には、営業に関する特権が与えられた。

藩の庇護のもと有松は絞りを独占して発展したが、幕末になると藩により独占権が解除された。

## (2) 自由営業による競争 - 明治・大正時代

明治時代には絞り業が自由になり、有松の独占は崩れた。東海道の旅行客も減り産業は停滞した。1874(明治7)年には、有松の総戸数は264件あった<sup>25</sup>。戸数の約1割が絞り商であった。有松の老舗の橋本屋、竹屋、井桁屋などは1877年ころから東京・大阪・名古屋などの販売網を拡大し、危機に対応した<sup>26</sup>。東海道線の開通により絞りの販路や運送は大きく変化した。この時期さまざまな絞りが考案され、鈴木金蔵は機械による絞りである「嵐絞り」を考案した。

1893年になると現在の有松を構成する有松町と桶狭間村が合併した。1894年の統計によると、有松町の全体の70%が絞り業に就いていた。

1890年代末から、有松、鳴海では絞りの組合が組織された。1907年には愛知県内の組合の連合会が結成された。大正期になると絞り業は停滞に入った。1917(大正6)年には絞り業者が熱望していた愛知電気鉄道(現在の名古屋鉄道)の有松線が開通し、業界の発展を支えた。当時、竹田嘉兵衛は愛知電気鉄道の取締役であり、久田伊佐衛門、服部孫兵衛は大株主であった<sup>27</sup>。

24 (平尾 2005 : 11)

25 (有松町史編纂委員会 1956 : 27)

26 (堀江 1978 : 55)

27 (有松しほり編集委員会 1979 : 145)



### (3) 再興 - 昭和初期 (戦前)

昭和初期には業界は慢性的不振にみまわれていた。業界の結束力を高めるため有松で1933(昭和8)年に絞開祖、竹田庄九郎の建碑が行われた。続いて鳴海でも1934年に絞開祖、三浦之碑が建立された。組合は1934年に第1回「志ほり祭」を盛大に行った<sup>28</sup>。以後、毎年絞の最盛期である7月11日に行われ、業界の発展に大きな効果があった。1939年から1940年ころの最盛期には、絞り業への従業者は10万人ほどいた。しかし戦時中には木綿が統制品となり割り当てがなく、技術保全のためにスフ織物がわずかに配給されるのみで、大部分の業者が転廃業した。

### (4) 昭和後期 (戦後)

戦後、愛知県下の絞り組合は再編された。1957年には、絞りについて国が記録を作成し、「有松鳴海絞」として無形文化財に指定している。1963年になると愛知県鳴海郡が名古屋市に編入された。翌1964年に知多郡有松町と大高町がさらに名古屋市に編入され、現在の緑区が構成された。同年、「有松絞技術保存振興会」が結成され、絞り技術の保存と振興に寄与した。当時、自動車産業をはじめとする賃金のよい労働へと従業者が移り、絞り業に就く人口は減少していた。1974年になると「伝統的工芸品の振興に関する法律」が施行され、1975年9月に「有松・鳴海絞」は通商産業省(現経済産業省)より「伝統的工芸品<sup>29</sup>」の指定を受けた。しかし日本国内の人件費の高騰により、中国や韓国への生産工程の一部委託が行われている。海外で生産された低価格の商品が日本で売られ、競争はさらに厳しくなっている。絞りは現在、愛知県下で約65業者、年生産額は約80億円程度と見られている。有松では24業者、年生産額は30億円程度である。

28 (有松しほり編集委員会1979:161-162)

29 伝統工芸品としての「有松・鳴海絞」は絞りの技法、原材料、製造地域が指定されている。技法は縫絞・巻上絞・皮巻絞・三浦絞・鹿の子絞・手筋絞・蜘蛛絞・板締絞・箱染絞・嵐絞・村雲絞の詳細を指定。原材料については、生地は絹織物又は綿織物、くくり糸は綿糸、絹糸、または麻糸と指定。製造地域は愛知県、名古屋市、岡崎市、一宮市、半田市、刈谷市、安城市、東海市、知立市、豊明市、知多郡東浦町及び南知多町、西加茂郡三好町が指定されている。産地組合名には「愛知県絞工業組合」が登録されている。(愛知県産業労働部2003:6)

## 2-2 絞り業と地域社会

有松・鳴海絞の特徴は、絞りの種類が多いことである。括りと染めの組み合わせで100種類以上があるが、現在では40から50の加工技法しか行っていない。生産工程が複雑であり、型彫り、絵刷り、括り（絞り加工）、染色、仕上げなどの分業形態がとられている。明治・大正のころ有松の村や町の長は、歴代絞り商が担ってきた。地域の小学校をつくるために寄付をしたのも絞りの大棚であった。

現在、有松にある絞りの会社の多くは江戸時代や明治時代に本家から分家して営業している会社である。明治維新後や第2次世界大戦後という転換期には、絞り業につく人々も入れ替わっている<sup>30</sup>。絞り産業が、その製品を業者や百貨店に流通させるシステムになってからは問屋の面が強くなり、旧東海道沿いで個人のお客に対面で販売されることはなくなった。また生産者の数が減ったことで、分業の形態では仕事が成り立たず、絞りの工程の多くをこなす製造卸の業者が増えた。そのため一人のひとが手間のかかる高度な技術を習得するより、多くの種類をつくることが求められ、技術の蓄積がなされにくい。1977年には絞り専門の小売店舗が1軒開店し、近年20年間にその数が増えてきた<sup>31</sup>。これは「町並み保存」運動や、絞りまつりの開催により再び旧東海道を観光の場にしようという活動が増えたことによる。

絞りをつくる人々は生産工程のアジアへの委託、絞り技術の限界、後継者不足という課題に直面する。経済的な要因が、有松の人々にとっての「絞り」を生業から観光資源へと移行させてきた。一方、絞りを売る人々は、有松のイメージアップで観光客が増えることに期待している。

## 第3章 まちおこしの運動と観光

### 3-1 町並み保存の運動

日本各地での急激な開発の弊害が明らかになりつつあった頃、公害訴訟をはじめ自律的な行動により景観や生活環境を守る運動が起こった。1964年に

30 (有松しほり編集委員会 1979: 178)

31 (名古屋市教育委員会 1980: 110)

は鎌倉で財団法人「鎌倉風致保存会<sup>32</sup>」が設立された。これはイギリスで1895年に創設されたナショナル＝トラストの運動<sup>33</sup>にヒントを得て、日本ではじめて行われたナショナル＝トラスト運動である。

有松でも歴史ある町並みを保存しようという動きが始まった。有松に残る町並みは、天明の大火後から絞問屋を中心につくられた防火建築に特徴がある。瓦葺の屋根、白と黒の漆喰がぬられた塗籠の軒裏、なまこ壁があげられる。こうした建築は明治以降もつくられた。また絞問屋の間口と建物は大きく、その配置は宿場町の町屋にくらべ、問屋を中心にゆったりとした町並みである。問屋の中には敷地内に別棟の座敷をつくり、門塀をかまえ、諸大名の来店に備えたものもあった<sup>34</sup>。「服部家住宅」は1964年に愛知県の有形文化財に指定されている。こうした町並みの保存に、絞り業者を核とした近隣の賛同者が運動をはじめた。以下、有松で始まった「町並み保存」運動の経過を、「有松まちづくりの会」の会報「有松」の要約とともに追う。

1969年、朝日新聞社の石川忠臣氏から竹田嘉兵衛氏へ話がもちかけられたこともあり、有松のまちづくりがスタートした。有松絞商工協同組合理事会において、「有松町保存準備会」がつけられた。1972年には「有松まちづくりの会準備会」へとかたちを変えた。町並み保存の運動は草創期にあり、妻籠、京都、萩などでは観光指向の町並み保存が始まった。1973年には服部孫兵衛氏を初代会長に選出し、「有松まちづくりの会」が生まれた。同年、有松の山車「布袋車」<sup>ほていしゃ</sup>「唐子車」<sup>からこしゃ</sup>「神功皇后車」<sup>じんぐうこうごうしゃ</sup>が名古屋市有形民俗文化財に指定されている。この時期、町並み保存の運動は興隆期といわれ、高度経済成長の開発の反省から、全国各地で住民を主体とした町並み保存運動が起こっていた。同年、長野県南木曾町の「妻籠を愛する会」、奈良県橿原市の「今井町を保存する会」、  
「有松まちづくりの会」の人々が竹田嘉兵衛氏宅に集まり、「町並み保存連盟」

32 1960年代のなかば、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の裏山の御谷に業者が宅地造成工事を計画した。住民たちは古都の景観の破壊を心配し、財団法人を結成し、募金を集めて工事予定地を買い取る方策をたてた。(木原1984)

33 野放図な開発から自然環境や歴史的環境が破壊されるのを未然に防止するため、国民から寄金を募って土地などを買い、または寄贈を受けて保存・管理する運動である(前掲書:36-45)。

34 (歴史的環境研究会1980:121)

が結成された。1975年になると「町並み保存連盟」には、大阪府富田林市の富田林、長野県塩尻市の奈良井が入会し、メンバーが5地区になった。団体の名称を「全国町並み保存連盟」とした。同年、文化財保護法が改正され「伝統的建造物群保存地区制度（通称「伝建」）」が生まれた。1976年には、妻籠など7地区が全国で最初の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。1978年、「町並み保存連盟」は「第1回町並みゼミ」を有松・足助で開催した。このゼミでは「地域の創造の主体は、住民であり、自治体であり、それに協力する専門家である。この3者が、それぞれの特性を生かしながら協力関係を築き上げていくことである」という「有松・足助宣言」がされ、町並み保存の成功の秘訣が認識された。

1980年になると、行政が有松の町並み保存について動き出した。名古屋市は「市基本計画」で町並み保存事業を計画目標に設定し、1981年「第6次市短期計画」のなかで町並み保存事業の実施を決めた。1983年には「町並み保存要綱」を策定した。有松は1984年に名古屋市の町並み保存地区第1号に指定された。旧東海道を中心に名鉄と国道にはさまれた19.5haの区域が保存地区となった。

1984年には有松・鳴海絞会館が設立された。この有松・鳴海絞会館は、有松への観光客が訪ねる中心的な施設である。この施設では伝統工芸士による括りの実演を見学できる。来館者は体験教室や展示を楽しみながら絞りを購入できる。会館は有松絞商工協同組合が管理している。有松絞商工協同組合の理事長は有松・鳴海絞会館でも仕事にあたる。この会館で括りの実演やサービスをする「ホスト」の多くは、有松に住む人々である。図1は2002年度から2005年度の来館者数の統計グラフである。図2は、月別の入館者数を年度別に折れ線グラフで表した<sup>35</sup>。春や秋の後楽シーズンは団体観光客が多く、月に1万人の来館がある。現在、会館の運営は赤字状態であり、今後より来館者が増えることが望まれている。1987年には「服部幸平家蔵」が県の有形文化財に指定された。同年、「岡家住宅」が名古屋市の有形文化財に指定された。

35 6月に開催される絞りまつりには7万から10万人の人出があるが、グラフの集計からは除いた。

1988年には有松山車会館が開館した。これは「有松山車会館運営協議会」が中心になって開かれた。有松の3台の山車「布袋車」「唐子車」「神功皇后車」のうち、1台を定期的に展示している。歴史資料等も展示されている。3台の山車は毎年10月第1日曜日に開催される「有松祭り（天満社祭礼）」にひきだされる。最近では6月に行われる「絞りまつり」にも展示される。こちらの施設も運営・維持にコストがかかり、「有松山車会館運営協議会プロジェクト委員会」を中心に、山車を目玉にした観光イベントを増やそうとしている。

1992年には「小塚家住宅」が名古屋市の有形文化財に指定された。1995年には「竹田家住宅」が同じく指定されている。1992年は絞り関係者が名古屋で第1回「国際絞り会議」を開催した。世界20カ国から850人のデザイナーや研究者が参加し、ディスカッションやファッションショーをした。会議ではアメリカのスミソニアン美術館の参加者より、絞りとは「Shaped resist dyeing（立体的に防染された染め物）」であるとの概念が示された<sup>36</sup>。その後「国際絞り会議」は1996年にインド、1999年にチリ、2002年にイギリス、2004年にオーストラリアで開催された。2005年には東京で第6回が開かれた。有松・鳴海絞は世界のテキスタイル業界の注目を集めた。有松は例年、経済産業省の「JAPANブランド」の企画にも取り組んでいる。2005年からは有松「らしさ」を追求した「地域ブランド」の商品を企画している。絞りのアピールとともに町並み保存の運動が続いている。

---

36 (平尾 2005: 36)

有松・鳴海絞会館 年間入館者数

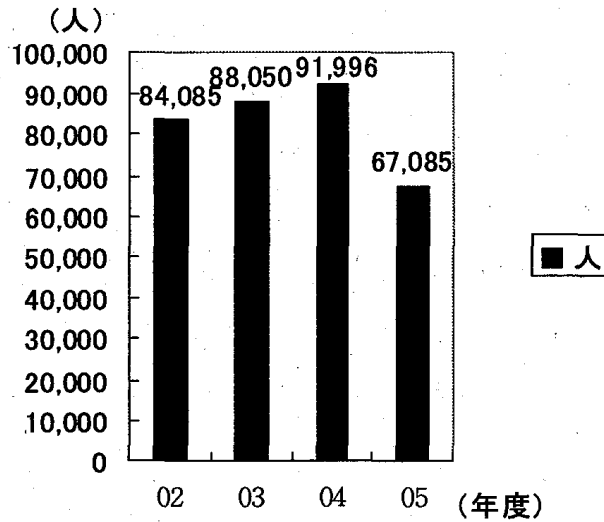


図1 有松・鳴海絞会館の提供資料より筆者作成

※ 2005年度は11月までの合計による

有松・鳴海絞会館 月別入館者数の変化

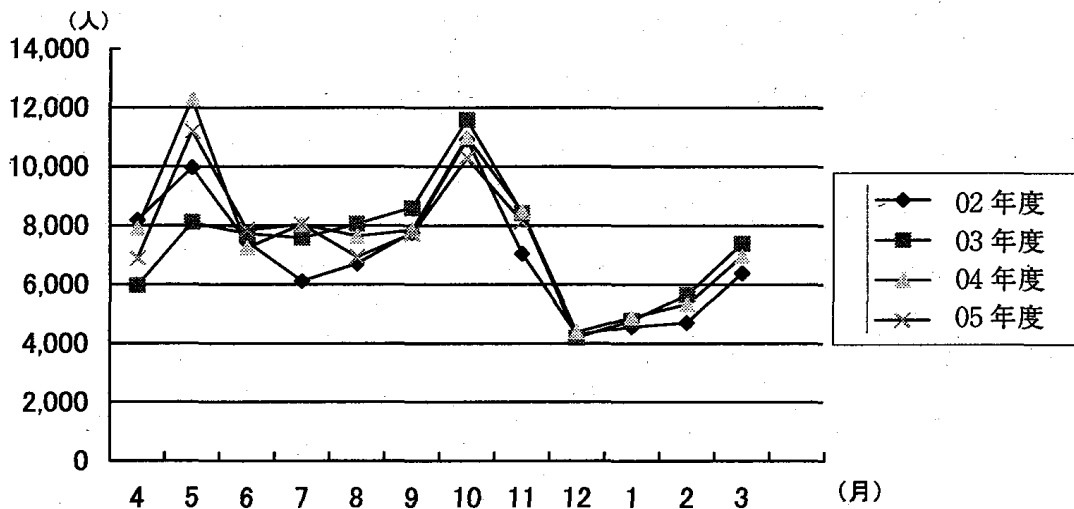


図2 有松・鳴海絞会館の提供資料より筆者作成

※ 6月の有松祭りまつりによる来館者概数分は除く

### 3-2 祭と地域社会のつながり

緑区には商工会や神社を中心にした多数の祭がある。有松では大きく2つの祭り、「秋季大祭(山車祭り)」と「絞りまつり」がある。有松では絞り業に携わる人々のつながりの他に、文嶺講と呼ばれる祭組織が機能している。以下に、「秋季大祭」と「絞りまつり」についてまとめる。

### (1) 秋季大祭 - 山車祭り

有松の秋季大祭（山車祭り）は、天満社の氏子がつくる文嶺講により執り行われる。戦前は町内会と山車祭りの組織は同一であった。絞りの豪商から選ばれた地位の高い「中老」が、祭りのすべてを指図し経費の大半を負担するしきりであった。祭りは毎年中秋の名月を最終日とする3日間であった。

戦後、中老の制度は廃止され、2年に1回、10月の最初の日曜日に山車を引き回すようになった。1946（昭和21）年、GHQの指令で旧天満社氏子組織が文嶺講として公的に成立した。以後、山車祭りは文嶺講の祭礼総代を中心に行うことになった<sup>37</sup>。1964年には有松が名古屋市に編入され、町内会の区割りが変わり文嶺講も再編された。この再編以後、祭は町内会ではなく文嶺講が責任をもつようになった。氏子の住む地域は3つの祭礼町に分けられ、東町・中町・西町と呼ばれる。橋東町・清安町・金龍町ともいわれる。有松天満社の氏子は、有松学区（小学区）と旧鳴海町内の東丘学区の一部、太子学区の一部にまたがっている。ちなみに緑区有松町は現在、有松学区・桶狭間学区・南陵学区の3小学区から構成され、町内会と祭礼町が重なるのは有松学区のみである。東丘学区は1958年の鳴海団地の成立以降にできた。太子学区の一部は1971年頃の成立であるが、それまでは東丘学区に含まれていた。東丘学区と太子学区の一部は、以前は七軒屋とよばれていた住宅地である。現在、祭礼町への所属は血縁をもとに決めることが多い<sup>38</sup>。

この祭では男性が自分の町の山車を動かし、お囃子を奏でながら旧東海道を行き来する。山車の楫を切り、からくり人形を操る見せ場がある。祭礼町ごとに揃いの絞り浴衣と法被を着る。山車は祭礼町に1つずつあるが、普段は町内会の所有である。祭の10日前から毎晩年行事ねんぎょうじと呼ばれる祭り宿に集まって、お囃子の練習や山車の点検が行われる慣わしになっている。有松山車会館は東町の年行事として使われる。お囃子は小学校4年生くらいから習い始める。昔は各家の長男が習うしきりであった。次男以下は、成人後他の地域へ移動してしまう恐れもあるからだという。近年は次男以下も習うことがある。役

37 (名古屋市教育委員会 1997: 99)

38 (前掲書: 84-86)

割にも決まった名称があり、囃子方、<sup>はやしかた</sup> 楫方、<sup>かじかた</sup> 人形方、<sup>にんぎょうかた</sup> 総代<sup>そうだい</sup>という分担がある。女性は参加できない。主に料理や衣装の準備といった裏方にまわる。結婚により他の地域から来た女性は、祭を何度も経験しながら準備のしかたをおぼえるという。かつては職業や家の格で、担う役割が明確に決まっていた。現在もその名残はあるが、厳格な区分ではない。厄年の男性は、会をつくり資金を出し合い、まちや神社の整備に役立つものを寄付する。祭礼町を横断するかたちで、厄年の会が毎年つくられる。祭は日中は神事、夜は余興の性格をもつ。この日は普段離れて生活している親類や核家族の親子づれが見物に集まる。この祭は1990年からは毎年行われるようになった。現在、文嶺講では山車祭りに使う費用を講員ごとに月100円、年間1200円を集めている<sup>39</sup>。

2002年からは有松字桶狭間の太鼓グループから発したダンスグループ「よろずや有松」の創作ダンスも加わった。「絞りまつり」では1999年から踊りを披露している。「よろずや有松」で活動する中心メンバーは、今年の文嶺講の役員でもあった。「よろずや有松」は「にっぽんど真ん中祭り」に2回参加したことで、愛知県内の他のダンスグループとも活動する機会が増えた。山車祭りには緑区内や豊明、知多のダンスグループを招いて、旧東海道と有松駅前のショッピングセンター「イオン有松」のイベントスペースで午後に踊った。有松の区政協力委員の方の親戚が、知多のダンスグループで活動していた関係もある<sup>40</sup>。

筆者はお囃子の練習を各山車庫に見学に行ったが、中町の山車庫は区画整理と関連し興味深い事例であった。山車庫は名古屋市住宅都市局から2005年度の都市景観賞を受賞した。中町のお囃子の練習には大人6人、子ども4人ほどが来ていた。そのうち、比較的高齢の男性にお話をきいた。「ここはねえ、建て替えてまだ新しいもんだから、木の臭いがするでしょう。昔の山車庫の瓦も中の棚に取りつけてある。ああいうものも大事にとっておくんたわ。ここは市の区画整理にちょうどひっかかって、その関係でなおしたの。」

39 2005年11月に有松・鳴海校会館理事長、近藤氏への聞き取りによる。自身が若い頃に比べたら、子どもの数や見物客は随分減ったという。

40 2005年11月、「よろずや有松」の小木曾氏への聞き取りによる。



福井から来た宮大工が住み込みでつくったんだわ。大手の建設会社がもとうけでね。市が入札で一番安いところに決めるでしょう。」

東町のお囃子の練習を見学した際には次の話を聞いた<sup>41</sup>。

「山車の修理はここらへんの建具屋さんとかだね。からくり人形の修理はさしもの屋さんとかがやって、専門的な事は人形の玉屋さんだね。ここに来る地域の人の職業で、だいたい祭の準備はできるんだわ。」

山車や山車庫の管理は、各町の裁量で行われている。

## (2) 有松絞りまつり

1934 (昭和9) 年に第1回「志ほり祭」が絞商工同業組合により盛大に行われた<sup>42</sup>。絞りまつりは、戦前から単発的に実施されていた産業祭の一種であった。戦後には1950年6月に一度行われている<sup>43</sup>。

1985年からは「有松絞りまつり」が毎年開催されている。「町並み保存」運動の継続と並行して、絞りの振興を主な目的とした事業である。1985年から1987年までの3回は、有松絞商工協同組合が独自で主催した。祭には1800万円の経費がかかり、名古屋市から300万円弱の補助金を得て行われていた。地元志向であった祭を、1988年から有松絞商工共同組合、有松商工会、愛知県絞工業組合の3者の共催で、有松以外の人でも訪れることができる祭りに拡大し、「絞りまつり」と名づけて催した<sup>44</sup>。

「絞りまつり」には、様々な準備が行われる。名鉄の急行の臨時停車の交渉、借り店舗の交渉、宣伝方法、祭り広場の設定、全国町並み展、子ども広場、模擬店コーナーなどの取り決めである。この祭により有松は知名度が上がり、旧東海道沿いの町並みを歩く観光客が多く訪れるようになった。現在では2日間で約10万人の来客があり、1億円を売上げる規模になっている。有松商工会提供の資料によると、前年まで「絞りまつり」の実行委員会は4チーム（総務、催事、広報、販売）であったが、2005年は9チーム（渉外、環境、文化催事、テーマイベント、外部招聘、広報、メイツ担当、販売、バザー）に細分化され

41 2005年9月に東町の山車長を務める濱島氏への聞き取りによる。

42 (有松しほり編集委員会 1979: 161,162)

43 2005年10月に有松・鳴海絞会館で行った聞き取り調査による。

44 2005年10月に有松・鳴海絞会館で行った聞き取り調査による。

ている。各チームは、有松絞商工協同組合と有松商工会の会員から構成される。実行委員長は有松絞商工協同組合の理事長が担う。

### 3-3 地域の観光化への活動

#### (1) 国との連携 - 観光実践プラン

有松では、有松地区にある桶狭間と連携して「有松桶狭間観光振興協議会」を設置し、国土交通省のすすめる「実施プラン」に2005年から選定された。協議会のテーマは「歴史観光・産業観光<sup>45</sup>・街道観光による三位一体観光まちづくり～「桶狭間の戦い」、「有松絞り」、「有松町並み」の連携～」である。有松を訪れる観光客を、現在の年15万人から2010年度には年20万人に増やす目標をもつ。達成するための課題は、「有松・桶狭間で一体となった情報発信がない」「旅行会社・旅行関係機関など情報発信媒体が未活用」「ガイドによる案内がない」「楽しめる散策コースが不明で、案内板や解説版がない」「観光コンテンツの掘り起こしと充実が必要」と計画書にまとまった。国土交通省の担当者、名古屋市の担当者からも、例えば絞りの体験学習的なプログラムを考案してはどうか、ベンチ、トイレの整備が必要だという助言があった。有松都市整備事務所の担当者は、活動の初動期に賛成・反対両方の住民が参加することが重要だと述べた。有松の地域内の合意形成の過程は、絞り商が町のことを決めていた頃に比べると複雑である。行政は第三者的立場で住民の意見の調整役として関わる場面が増えている。協議会では、観光客が有松の文化財や暮らしの一面を味わう「遺跡ツーリズム」や「民俗ツーリズム」のみならず、有松の地理や自然環境も含めた「エコ・ツーリズム」が提供できるよういくつかの散策コースをつくりたいとしている。また街道沿いを着物で楽しめる企画をし、文化財である家屋の開放を視野に入れている。そこで有松と桶狭間の魅力を住民同士の意見交換からあぶり出す作業が進められた。9月末に開かれたワークショップでは「地域の人にPRするには？」がテーマとなった。まずは近隣住民が有松・桶狭間の良い点、「らしさ」を再認識し、観光化に一体となって

45 「産業観光」とは工場や造船所、農業施設といった、産業に関する歴史や文化を対象とする観光である(須田:2001)。有松桶狭間観光振興協議会では、JR東海相談役の須田氏が提唱する「産業観光」をキーワードのひとつにしている。

もらうことが出発点だと話し合われた。

国土交通省では、魅力ある観光地づくりの推進のため、平成15年度より「観光交流空間づくりモデル事業」を実施し、2003・04年度に全国で24地域を選定した。2005年度からは、「国際競争力のある観光地づくり」をより推進するため、「観光地域づくり実践プラン」として見直し、地域を公募した。平成17年度には全国で9地域の「実践プラン」が選定された。「一村一品運動<sup>46</sup>」と共通する「一地域一観光<sup>47</sup>」が推進されている。

## (2) 名古屋市との連携 - 緑区ルネッサンスフォーラム

名古屋市新世紀計画2010に基づいた「区の魅力づくり事業」として、区民・企業・行政のパートナーシップによるまちづくり事業が行われ、予算が当てられている。

緑区では「歴史文化交流支援事業」として2003年より「緑区ルネッサンスフォーラム」という組織が結成された。2005年9月現在では会員40名に加え、緑区役所まちづくり推進部地域振興課の担当者が協力している。会員の年齢層は高く、定年をむかえた男性や主婦が多い。地域の自営業者や教授も入会している。4つの部会「高札場復元部会」、「史跡散策部会」、「資料館・資料整備部会」、「広報部会」がある。会のパンフレットには「東海道の宿場と絞りで栄えた鳴海、江戸時代以来の伝統家屋と絞りを今に伝える有松、酒造業と古代の歴史を秘めた大高、信長の出発点となった桶狭間」と地域が紹介され、「この緑区のすばらしい文化遺産を後世に伝えながら緑区のまちの再活性化を願う新たな組織」とPRしている。第36回の会合では、会員から「緑区の全体の方に入会していただくのが望ましい。今のところ、若い人が入っていないですから全体としての動きになっていかない。どうやったら、みなさんにルネッサンスフォーラムを知っていただけるか。それを考えることが大事じゃないでしょうか。」との意見が出た。これからの活動への意気込みと計画、改善点が話し合われた。

46 平松守彦前大分県知事が1979年より市町村長によびかけて展開した地域づくりで、各地域が誇れる特産品をうみだし町おこしにつなげることを提唱した(平松1982)。

47 「各地域がそれぞれのもつ魅力を自主的に発見し、高め、競い合うこと」を推奨している。国土交通省を中心に省庁を横断する行動計画がすすめられている。(観光立国関係閣僚会議2003:9-20)

緑区ルネッサンスフォーラムの会員の中には、「有松まちづくりの会」、「有松あないびとの会」で活動する人も多い。

## 第4章 地域社会のつながりと内発的発展の多様性

### 4-1 住民「内部」のつながり

「山車祭り」と「絞りまつり」では、個人が時と場所によりいくつもの集団に属し役割を担っている。絞りの組合、文嶺講や祭礼町の単位、厄年で作る年齢階梯の会、親類、まちおこしの勉強会などである。毎年祭りのたびに、絞り業界や親族、友人どうしのつながりが確認され、地域の内外で商品、知識、お金などの交換がなされる。こうした人的ネットワークは、まちおこしの活動でも日常的に機能している。

有松にはまちおこしの中心的活動をするキーパーソンが複数存在し、協力者として重要な活動をする人々もいる。まちおこしの中心的活動をするのは、絞り業をはじめとする自営業の人々である。まちおこしのためにつくられた集団は、目的の事業を終えれば自然に解散し、同時に次の活動へと移っている。まちおこしの組織は国、県、市という行政単位に応じた構成員でつくられている。

表1を見ると、多数の団体のなかでも「有松まちづくりの会」は最も長く続いている。60代以上の参加者が多く、有松以外の地域に住む人も加わる。「有松まちづくりの会」の事業部である「有松あないびとの会」は、申し込みのあった観光客の町案内を行う。有松の町並みが重要伝統的建造物群保存地区に指定されることもめざし、活動している。

近年の活動で目立つのは「有松山車会館運営協議会プロジェクト委員会（通称、ありプロ）」である。会では、山車と景観を生かしたまちおこしを模索している。有松の中でも東町の40代から50代の男性を中心に運営される。第3セクターのビル管理会社「イーストヒル」の社長が代表をつとめる。イーストヒルは、イオンに併設する4階建のビルに事務所を持つ。広報には、伊勢出身のITの会社に勤務する男性らが加わる。IT会社では有松の他に伊勢、鳴海などの「地域ホームページ」の作成をしている。ありプロは、緑区役所のまちづくり推進部と共同で外国人向けの「有松イラストレーションマップ」を作成し、

2006年から市内の主要な場所に設置している。

2005年には、イーストヒル内に「有松まち普請の会」が設立された。この会では、現代の生活形態を考慮したまちづくりを模索している。イオンと名古屋市の出資でできたイーストヒルは、イオンが名古屋市に支払うテナント料の管理をしている。イオンは住所としては鳴海に立地する。この会にはイーストヒル管理会社社長をはじめ、このビルに事務所を持つ人々やイオンの経営関係者、鳴海で商売をする東丘発展会の人々が集う。「有松まちづくりの会」から「有松まち普請の会」へ移った人々もいる。「全国町並み保存連盟」にも加盟し、有松から加盟する団体は「有松まちづくりの会」とともに2団体となった。2006年にはイオン前の広場に、ガラスの絞りがあしらわれた高さ約14mのモニュメント「藍流」が完成した。ガラスや金属にも絞りをほどこす地元の絞り作家、早川嘉英氏のデザインによる。モニュメントは布をひねって絞り上げる形をモチーフにし、下の方から「過去・現在・未来」を表すという。有松の歴史を礎に未来へと発展する様をイメージしている。名称は一般からの公募で決まった。絞り染めの藍色が川のように美しく色を変化させながら、有松のまちを染めるという意味が込められている。発足間もない「有松まち普請の会」では、他のまちづくり団体と協働した大きな事業であった。

また、2003年には有松再生プロジェクトとして有松商工会を中心に空店舗対策事業が進められた。県や市に空店舗対策の支援要請をし、教育委員会に景観補修のための支援を求めた。古い家屋をもてあました持ち主がビルに建て替えようかと思案していたのを、商工会が仲介して有松に数少ない飲食店が開業した。「神半郎」と名づけられ、現在はNPO法人として運営され、若手の絞り作家のものを扱う店「品」や、飲食の専門業者によるレストラン「籠」や「石窯パンの専門店ダーシェンカ・蔵」が開店した。他にも古い家屋が「てまり屋」、「クリエイターズこらぼ」という作家の作品を多く販売する店になった。旧街道沿いに住民が企画した複数の店舗が生まれつつある<sup>48</sup>。

観光化の中心として活動する「有松桶狭間観光振興協議会」は、商工会、絞組合や有松のまちづくりに関する以下の10団体から構成される。有松学区区

48 (山本2005:99)

政協力委員会、桶狭間学区区政協力委員会、有松商工会、有松絞商工協同組合、有松まちづくりの会、有松山車会館運営協議会、有松天満社文嶺講、桶狭間古戦場保存会、愛知県絞工業組合、有松商店会である。

以上に述べた会の代表はまちおこしの活動におけるキーパーソンである。「絞りまつり」、「山車祭り」でも重要な役割をになう人々である。'60代から70代の絞りに関する職業の人が多。複数の団体が相互に競争や連携をするなかで、まちおこしの活動は促進されている。

表1 有松のまちおこし活動の組織

発足年順（現在活動の続く団体の代表者名は2005年のもの）

名 称	発足年	会員数 (人)	代表者	活 動 内 容
有松町保存準備会	1969	—	竹田嘉兵衛氏	文化財としての町並み保存の準備
有松まちづくりの会の準備会	1972	—	竹田嘉兵衛氏	生活者の視点から町並み保存の準備
有松まちづくりの会	1973	約 310	服 部 豊 氏	町並み保存をめざしたまちの歴史・文化の勉強会開催 事業部として「有松あないびとの会」が活動する
有松あないびとの会	—	38	成 田 治 氏	観光客の案内 会員は同時に「有松まちづくりの会」にも入会する
有松山車会館運営協議会	1988	—	—	山車会館設立、管理運営
有松区画整理まちなみ協議会	1996	約 150	阿知葉征彦氏	区画整理地区地権者の会合
有松山車会館運営協議会プロジェクト委員会	2002	—	近 藤 鋭 治 氏	山車の活用による町の活性化、交通・景観整備、地域を紹介するHPの開設・運営
有松桶狭間観光振興協議会	2004	10 団体	近 藤 好 彦 氏	観光化を目指した「観光実践プラン」の計画・実施
有松まち普請の会	2005	—	徳 田 和 子 氏	東丘発展会やイオンを中心とした、鳴海の再開発地区と有松保存地区の活性化

## 4-2 住民と「外部」のつながり

### (1) 行政

有松では、名古屋市指定の保存地区と、市街地の再開発地区、区画整備地区が並存する。保存地区は都市の変化の中に存在している。生活の利便性をみると、名鉄有松駅の周辺は中心市街地の活性化のため国の「まちづくり交付金」を用いて再開発された。この再開発の後、名鉄の停車する本数は増え住民や観光客は利用しやすくなっている。保存地区の北の鳴海では「イオン有松」が開店した。有松駅の南の地区では、「快適でゆとりある新しい市街地形成を目指して」土地区画整備が行われた。保存地区の西には環状2号線が南北に走る。町並みの保存の面では、区画整理で保存地区内の「絞り小道」と呼ばれた路地や、楠の大木がある「中舩なかつの森」と竹やぶが失われた。再開発にともない道路が拡張され交通量が増えた。そのため車が保存地区を分断するように走り、観光客の安全な横断が確保されていない。住民と行政は、都市における生活と町並み保存の両立を模索し続けている。

有松のまちおこしの団体は会合に「有松都市整備事務所」の職員の参加を求めることも多い。生活の変化と町並み保存の両立について話し合いを重ねている。筆者は「有松都市整備事務所」と町並み保存の関連を知りたく、事務所を訪ねた<sup>49</sup>。まず、駅前の中心市街地活性化のための再開発について尋ねた。「大型店のイオンは名古屋市がつくったテナントをすべて借りて営業しています。最初から土地を買うには大きな資金が必要になりますから。市からの借り上げの形にして、テナント料を支払っていく仕組みです。イオンの瓦や壁は、市の「まちなみ指針」に沿って作り色、形に配慮してあります。イオンに隣接する4階建てのビルが「イーストヒル」ですね。ここは市とイオンと地権者の人たちが計画した第3セクターのビルで、いくつか店舗も入っていますね。まちづくりの一例ではないでしょうか。」

町並みの保存や調和をどう進めているのかを聞いた。

「まちなみについては、行政で方針を決めて進めています。「まちなみ指針」に合うデザイン例をいくつか提案しています。「まちなみ指針」は「地区計画」

49 2005年9月に有松都市整備事務所にて渡辺氏に聞き取りをした。

よりも厳しい基準があります。助成の制度も整えましたから、景観に配慮し基準にあった建物をつくる際には補助金が出ます。商店は都市計画のイメージ図のように、つくりをあわせた町並みにすることができるのです。それは個人の人々の商売のためにも利点があるから。けれど、一般の民家は好みもあるし、なかなか同じ雰囲気統一するのは難しいですね。他には、交番については県警とのやりとりで、まちなみに調和したデザインにすると決めました。」

住民の中でも町並みの保存、特に重要伝統的建造物群保存地区への指定について意見が分かれているようだが、賛成意見を持つ人々は指定された場合のどのようなメリットを期待しているのか、また反対意見を持つ人々はどのようなデメリットを危惧しているのかをたずねた。

「おそらくですけど、文化財になる建築物を持つ人には相続税の軽減や管理維持のための助成が行われる、これがメリットでしょうか。デメリットとしては、生活に規制を受けることになるのではという。改装も許可をとらないと出来なくなりますから。庭の木を切るといった程度の個人のお宅のことも、重伝健の地区になれば景観に気遣わなくてはならないし。いずれにせよ、地域の人たちの合意が形成できなければ市としては動けないのです。特に、住民の方が実施したアンケート結果で8割の賛成がありました。けれど、市の教育委員会が実施したアンケートでは住民の4割弱が賛成、6割弱が保留でした。市としては、まだ合意に至ったとは言えないと考えています。」

再開発と保存地区の共存について、市はどのような方針で進めているのかを尋ねた。

「ここの事務所は景観の面ではまちづくり、町並み保存に関わります。けれど基本的にはスクラップ・アンド・ビルトです。歴史や文化のある古いものを守ることは大切です。それと同時に住む人の利便性の向上も重要で、車が入りにくい道を広げたり、公園をつくったり、両方が必要だと考えます。」

「有松都市整備事務所」は市の住宅都市局の仕事の範囲で町並みや景観の向上をめざしている。まちづくりには、都市の個性に応じた「まちづくり条例」を制定し、自治体が独自に市街地整備や環境保全への姿勢を明確にする方法がある。名古屋市は1984年に「都市景観条例」を制定したが、「まちづくり条例」



は設けていない。1998年には「まちなみ指針」と「有松まちなみづくり助成」の制度をつくり、有松駅南地区計画を立案した。

## (2) 企業

有松の町並み保存地区の近隣にある「イオン有松」は、名古屋市が中心市街地活性化のために建設した店舗で営業している。筆者はイオンが地域のまちづくりにどう関わっているのかをたずねた。2005年12月にイオン経営関係者の岡田氏にインタビューをした。

「2階には公道を引き込んでいます。ですからあそこは市のスペースです。地域の方にお祭の時にも使ってもらえます。笠鉾<sup>かさほこ</sup>が並ぶ通路です。町並みの保存地区にまだ完備されていないもの、トイレだとか休憩所などもここで使えますから、それは観光のお客さんにも役立つのではないのでしょうか。店内にはいくつもベンチを置いています。若いひと、団塊の世代、シルバーと世代を越えて集まれる場所にしたいですね。今建設中の部分にはいずれ病院、デイケアセンター、カルチャーセンターも入る予定です。店舗であるとともにまちの機能を持たせ、コミュニティーの集う場所にするというのかな。地域の大人や子どもの描いた絵を展示することもあります。私は店づくりについてこの3つを重視しています。「地域密着」「イベント」「まちの再生」というコラボレーションです。私は今「有松まち普請の会」のメンバーにもなっています。まちづくりと言っても住む人の主体性が必要ですね。どこの地域でも言えることですが、外部からの寄付や補助金を頼りすぎるとは、成功しない。それに意識を変えていかないとね。新しい人や考えがどんどん入ってくる必要があります。イオンでは無料のスペースをお貸ししてイベントも随時やっています。どうぞお仲間をご利用ください。」

## 終章

有松では町並みを生かした観光によるまちおこしが追求されてきた。そこでは、キーパーソンの存在だけでなく、住民同士の密接な関係が要となっている。「絞りまつり」は、ゲストの「まなざし」を意識し、訪れる人々を積極的に歓迎している。それに対し「山車祭り」は住民のためのお祭りである。観光向け

の「絞りまつり」と並行して、このような住民が主体となった「山車祭り」が継続されているからこそ、地域の人的なネットワークが維持、更新されている。住民「内部」では複数のまちおこしの団体が活動し、事業が完了すると再編成される。必ずしも同じメンバーで同じ活動を継続するわけではない。絶えず複数の「内部」が流動的に存在している。住民の「外部」である行政も国・県・市という複数の単位があり、さらに文化財の保存を担当する部門と、都市の開発を担当する部門は異なっている。住民の「外部」には経済的動機で動く大企業もあり、ともにまちづくりをする仲間であると同時に、地元商工会が開いた店舗のライバルでもある。都市部における一地域の「内発的発展」は、政策側と住民側という二極の構造ではとらえきれない。都市のまちおこしの特徴は、複数の「内部」と複数の「外部」が連携しつつ緊張関係をもつ、多極的な様相にある。

筆者は、社会の構成員の流動、経済環境の変化といった地域、技術、ひと、ものに関する一定の断絶が、対象の「客体化」につながると考える。観光による「内発的発展」は、外部の「まなざし」により住民（ホスト）が自己の文化を確認し再構築する過程<sup>50</sup>でもある。ホストとゲスト両者の選択により、新しい「伝統の創造」がなされる。有松の町並みは歴史ある文化財であると行政や社会に認知させる過程で、住民自身も有松の歴史や文化の学習会を開き、有松の文化を「客体化」してきた。これは住民側が「客体化」すべき「真正性のある」対象を絞り込む作業であったといえる。それを経て、行政や大企業も「客体化」の過程に加わり観光の対象を生み出している。現在、有松が進める「観光実践プラン」やイオン前のモニュメント「藍流」は「伝統の創造」の一例である。観光化に向けて活動する有松の人々は、地域の中に「新たな真正性」を見出し、「客体化」する対象をひろげている。有松の「伝統」の「真正性」を保持、継承していると自任する活動主体は複数ある。主体ごとに「自任する真正性」が存在する。文化の「客体化」の内容は複数の団体間で異なり、多様である。一方、周辺地域の住民や観光客といったゲストの「まなざし」は、どの「まちおこし」に「有松らしい」「真正性」を見出すのか。有松の観光による「まち

---

50 (永淵 1996 : 42)

おこし」では、町並みの保存と、都市における生活の利便性がともに生きる「伝統の創造」が模索されている。

## 参考文献

- アーリ・ジョン 1995『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』（加太宏邦訳）  
法政大学出版局
- 有松しほり編集委員会（編）1979『有松しほり』有松絞技術保存振興会，名古屋
- 有松町史編纂委員会（編）1956『有松町史』有松町，名古屋
- 太田好信 1993「文化の客体化—観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57（4）：383-409頁
- 観光立国関係閣僚会議 2003『観光立国行動計画』
- 国土庁（編）1998『21世紀の国土のグランドデザイン』大蔵省印刷局
- 木原啓吉 1984『ナショナル・トラスト』三省堂
- 葛野浩昭 1996「観光旅行の諸類型—擬似体験としての観光旅行」山下晋司編『観光人類学』新曜社，123-130頁
- 須田寛 2001『観光の新分野 産業観光—産業中枢「中京圏」からの提案』交通新聞社
- ターナー・ヴィクター 1976『儀礼の過程』（富倉光雄訳）思索社
- 鶴見和子 1989「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会，43-64頁
- 永渕康之 1996「観光＝植民地主義のたくらみ—1920年代のバリから」山下晋司編『観光人類学』新曜社，35-43頁
- 名古屋市教育委員会（編）1997『名古屋市山車調査報告書4 有松まつり』，名古屋
- 長谷川政弘（編）1999『観光学辞典』同文館
- バレーン・L・スミス（編）1992『観光・リゾート開発の人類学』（三村浩史監・訳）  
勁草書房
- 平尾秀夫 2005「有松・鳴海絞り産業と発展形態」東邦学園大学地域ビジネス研究所編『有松・鳴海絞りと有松のまちづくり』唯学書房，9-40頁
- ファン・ヘネップ・アルノルト 1995『通過儀礼』（綾部恒雄・綾部裕子訳）弘文堂
- 保母武彦 1996『内発的発展論と日本の農山村』岩波書店
- 堀江勤之助 1978『有松・鳴海絞』名古屋鉄道株式会社，名古屋
- 松平守彦 1982『一村一品のすすめ』ぎょうせい
- 宮本憲一 1989『環境経済学』岩波書店
- 宮本憲一 2000『日本社会の可能性』岩波書店

山下晋司 1996「観光人類学案内 - <文化> への新しいアプローチ」山下晋司編『観光人類学』新曜社, 4-13頁

山本正彦 2005「有松のまちとまちづくり」東邦学園大学地域ビジネス研究所編『有松・鳴海絞りと有松のまちづくり』唯学書房, 53-138頁

歴史的環境研究会 (編) 1980『四間道と有松』名古屋市教育委員会, 名古屋